
Clostridium difficile 持続感染と考えられた偽膜性腸炎の一例

合田 薫 尾崎拓郎、斯波秀行、林 修平、中澤博子、前田優希、
山本直宗、阿部恵子、吉田麻美、金 善江、佐伯彰夫、福田泰樹

(恒昭会藍野病院 内科)

偽膜性腸炎は抗菌薬関連下痢症の一つで、*Clostridium difficile* (*C. difficile*) に起因するものが大半であり、高齢者や基礎疾患を有する患者で抗菌薬使用を機に発症しやすいとされている。今回我々は、摂食障害およびアルコール依存症に合併した、*C. difficile* 持続感染によると思われる慢性的な下痢を呈した偽膜性腸炎の一例を経験した。

症例は 31 歳男性、主訴は腹痛、下痢、嘔吐。

約 5 年前よりアルコール多飲、過食、嘔吐、体重減少を認め、近医精神科にて摂食障害およびアルコール依存症と診断され、入退院を繰り返していた。約 2 年前より下痢が出現、繰り返すため、1 年半前に内科的精査を受けたが原因は不明であった。

アルコール依存症の加療目的で精神科に入院中、1 月 20 日に発熱に対し抗菌薬の内服を開始したところ、数日後より腹痛、下痢、嘔吐が増悪し全身状態不良となったため、2 月 1 日に精査加療目的で当院へ紹介、入院。入院時身長 168cm、体重 30kg とるいそうを認め、血液生化学的検査にて炎症反応の上昇、低蛋白血症、貧血、脱水および電解質異常を認めた。また、胸腹部 CT で多量の胸腹水貯留が示唆された。糞便中 *C. difficile* 抗原陽性であり、下部消化管内視鏡検査にて S 状結腸を中心に大腸のほぼ全域にわたって黄色の偽膜形成を伴う広範な潰瘍性病変を認めたため、偽膜性腸炎と診断した。バンコマイシン 2g/日の 14 日間の内服により 2 年間続いていた下痢症状は徐々に改善、消失し、4 月 5 日の下部消化管内視鏡検査所見は正常化した。栄養状態の改善に伴い体重は 30kg から 40kg へと増加し、全身状態良好となり退院した。

本例では 2 年余り続いていた下痢がバンコマイシンの 2 週間投与のみで消失したこと、内視鏡所見が激烈であったことなどから、*C. difficile* が直近の抗菌薬投与にて急性増悪をきたしたものと考えられた。慢性的な下痢の原因として本症も念頭に置く必要があると考えられた。
